

中国「王朝化」のリスク

中国における最後の王朝国家・清は、アヘン戦争での敗北や農民反乱・太平天国の乱によって苦しめられ、孫文の辛亥革命により息の根を止められた。

以来、百年余の時間が経つ。この間、中国には王朝が存在しないことになっているが、はたしてそうだろうか。前回の本コラムで記したように、中国共産党の牙城・中南海の権力構造はかつてのいずれの王朝よりも王朝的である。

習近平を党総書記とする中国共産党の権力集中体制はますます強固である。習近平を取り巻く政治局常務委員、さらにその外縁に集う政治局委員の顔ぶれをチェックしてみれば、そのすべてが親習的勢力であり反習的な人物は誰一人として存在しないことがわかる。これはかつての王朝国家の、皇帝と皇帝を十重二十重に取り巻いていた臣下の王朝官僚群という構図と瓜二つであり、中央権力の強固なありようは中国史上最大かつ最強といわれた清王朝のそれを上回るほどのものである。

習近平は終身の党総書記たることを決意してい

渡辺利夫（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十二月退任。二〇一七年六月より現職）。

る。そうであれば、この体制は今後なお継続することになる。天下に君臨する習近平の専制的意思決定を覆す政治勢力が共産党の内部から現れる可能性はきわめて低い。

しかし、内モンゴルがありチベットがある。ここでの反中のセンチメントはなお強い。新疆ウイグル自治区の民族主義を武力によって抑え込むことは容易ではない。香港の反中国的政治行動は制圧されてしまったものの、台湾はどうなるのか。習近平は武力統一の決断も選択肢の中にあると明言している。台湾有事の危険な可能性のいかんは習近平の個人的決断にかかっているとみなければならぬ。中国の王朝化はむしろいよいよリスクキーである。

中国の史家・葛兆光氏はこういう。「グローバルな普遍的価値よりも中国的価値を誇大に主張するならば、国民感情は全世界的文明と地域的協力に対抗する民族主義あるいは国家主義となり、これこそが本当に「文明の衝突」を誘発することになる」。本質に迫る指摘であろう。